

2011年3月11日（金）の東日本大震災に対して、発生初期段階で行ったボランティア活動について報告する。

## 1. 茨城県大洗町

### 1. 1. 日時

2011年3月13日（月）

朝8時出発、現地15時着、現地16時発、21時帰着

### 1. 2. 現地入り前時点での情報・企画

情報：高さ4mの津波が押し寄せ、町役場も冠水した。港も転覆等大混乱で、多数の被害が出ていた。お亡くなりになられた方も1名いらっしゃった。13日の朝に避難所は閉鎖したが、停電、断水、停ガスは続いていた。茨城県の報道が非常に少なく、茨城県の県議に確認したところ、茨城県への物資供給が非常に滞っており、大洗は不明だが全体として非常に物資が不足しているとのこと。

企画：募金等は、緊急の援助にはならないため、足りていないと考えられる物資の運び込みを企画。不要物資は持ち帰ることとして運搬することにした。途中から徒歩になることを想定して、登山靴で行くこととした。大学の後輩の落合聖史君と2人で実施。



### 1. 3. 現地入りルート（ルートと選定理由、混雑状況）

- ・ルート：自転車で6号を北上し、長岡坂下から県道106号に入って大洗を目指す。
- ・選定理由：海岸沿いは津波の危険から通りたくなかったことと霞ヶ浦の鹿行大橋が落下のため通行止めだったことから。
- ・混雑状態：我孫子～取手辺りの上りの渋滞を除いて、車道は空いていたが、ガソリンスタンド前だけ、数百mから1キロ以上もの渋滞が生じていた。

### 1. 4. 運搬物資、準備について

#### ・運搬物資

食料：酵母パン 60個、ジャムパン等 10個、みたらし・あん・草餅団子 102本、ドラ焼き 23個、ツナ缶 5缶、大入りチョコ 3袋

電池等：電池単四 96本、電池単三 20本、携帯の充電器 10組

衛生用品等：貼るホッカイロ（13cm×9.5cm）300枚、

温湿布（14cm×10cm）100枚、

作業用品等：軍手 40組、ポリ袋（30枚入り）1袋



## ・準備について

現地入り前日の朝からスーパーコンビニを回って、買い占めないように小分けで買い込んでいったが、午後になると、どの店でもパンは全く見られなくなった。また、電池も単4電池を除いて見つからず、携帯用の充電器も、特にソフトバンク・Docomo 用の充電機が売り切れていた。午前中には大量に残っていたホッカイロも午後はほとんどなくなった。大洗へ向かう途中、6号沿いのコンビニものぞいてみたが、パンやおにぎりはことごとく売り切れていた。一か所だけ、パンありますとの張り紙が多数張ってあるコンビニがあり、入荷したてのパンが大量に並んでいた。

## 1. 5. 被災の状況（通った道や地域のみでの報告で全域を回った状況報告ではない）

### ・現地までの沿道について

道路：石岡から美野里の間で、歩道において多数の陥没、隆起、崩落があった。ただし、多くに警告用の赤いコーンが立てられており、素早い安全対策が取られたことが見受けられた。県道106号は、各所でひび割れが多く発生しており、多少の隆起・崩落が生じていたが、それらの個所も砂利で埋めた応急処置が取られており、基本的に自動車も通行可能な状況である。

建物：106号沿い（茨城町北部）では、石垣が多数倒壊、瓦が落ちている家も多数存在。一部壁がはがれている住宅も存在。ただし、致命的な倒壊をしている住居はない。

その他：一か所大規模ながけ崩れをしている地点があった。上の建物の柱ギリギリまで崩落しており、間一髪といった様子だった。また、墓地において、墓石の転倒なども確認された。



### ・現地（鹿島臨海鉄道高架の海側）

道路：高架を超えた途端に風景が一変した。気中に舞う土埃と道路上の泥。かなり多くの泥が除去されたようで、多数のごみ袋と泥や泥の山があった。

建物：軒下辺りがひび割れている住居は多数あったが、本格的な倒壊をしている住居は見受けられない。

その他：海沿いの道は自動車がフェンス上に乗りあげていたり、遊歩道のど真ん中にパンクして停まっていたりしていた。駐車場の車も、全て向きがバラバラで、津波で流されたことが見て取れる状況だった。その他、鉄柱の転倒やフェンスの転倒など津波により破壊された箇所が多数存在していた。



## 1. 6. 現地の状況・反応、現地での活動について

大洗町役場に行き、各種物資を運搬してきたことを告げた。必要ないものはすべて持ち帰ることを伝えたところ、「どれもとてもありがたいので全て頂きたい。避難所は閉鎖したが、会議室に30人ほど残っているし、食事を受け取りに来る人は多い。役場の海側にある建物の食事の配給場所に一緒に持って行ってほしい。」と言われ、連れて行っていただいた。避難所閉鎖の上、食事の配給場所は大洗市の文化センター二

階の屋外部分だった。スロープを上る途中には仮設トイレも数台設置されていた。建物の1階天井まで水が来たということで、建物の壁に泥の跡が残っていた。

食事の配給場所では、テントと机が出て、地元で製造したらしいパンと納豆と水のボトルの配布とアンコウ鍋の炊き出しが行われていた。おにぎりは尽きたらしく、なかった。地元の高校生と主婦等らしい配給のボランティアの数は多かった。自転車で担いできたパンや団子を出すと、高校生から歓声が上がリ、何道も何度も感動したとの言葉をもらい、重い荷物を持ってきたことが無駄ではなかったと実感できて、ありがたかった。アンコウ鍋を一杯勧められ、固辞したが食べてくれと言われたのでありがたく頂いたが、温かいものは格別で、心に沁みわたるようだった。避難所等で、できるだけ早く温かいものを食べられるようにすることの必要さを感じた。団子は賞味期限が翌15日ですと頼んだためか、団子を持って帰る人が目立っていた。

人手がいる作業はあるかと尋ねたところ、人手は十分とのことだったため、寝袋/銀マットを持参してはいたが、そのまま帰ることとした。街中は若い男性たちが総出で作業を行っているのが見受けられた。物資は足りてはいないが、小規模だからか活動という面では、地元の有志によるボランティアの統率がよく取れており、十分機能していると思われた。



## 1. 7. 誤算等

行きに後輪がパンクしてしまい、路上の脇でタイヤチューブを交換したので、少し時間を取られた。また、福島原発の水素爆発があり、いったん止まっていたの情報収集に時間と取られた。

## 2. 千葉県旭町

### 2. 1. 日時

2011年3月16日（水）

朝7時出発、現地12時着、現地17時発、23時半帰着

### 2. 2. 現地入り前時点での情報

情報：大きな津波が押し寄せ、多数の家が倒壊し、お亡くなりになられた方も11名いらっしゃった。避難所が複数箇所あり、多数の人が避難生活を強いられていた。3月15日に社会福祉協議会が、ボランティアセンターを立ち上げ、ボランティアの募集を開始したとの情報をホームページで確認した。ボランティア活動は3/16から開始されるとのこと。ボランティアセンターに必要な物を問い合わせたところ、食料その他どんな物資も足りないので歓迎とのこと。

企画：町の復旧、住宅整理の補助のための労働力として現地に入ることにした。距離があることと現地での労働があることから、担いで行く荷物は14日より少し減らすことにした。15日に複数のスーパーやコンビニを回ったが、パンなどのある程度日持ちする食品もホッカイロも手に入れることができなかった。高齢者が多いことを考えて温湿布とウェットティッシュを持って行くことにした。作業をするために、皮手袋や登山靴などを装備として持って行った。

### 2. 3. 現地入りルート（状況）

- ・想定ルート：国道356号を東へ向かい、成田南部を經由して多古を經由して旭市を目指す。
- ・実際ルート：途中通行止めが多く、甚兵衛大橋も通行止めのため、佐倉経由で国道296号を通過して旭市に入った。帰りは、銚子経由で利根川沿いを我孫子まで帰った。
- ・選定理由：最短ルートを選んで旭市に向かうため。
- ・混雑状態：我孫子湖北～布佐辺りでは、通行止めの箇所ではう回路において車の渋滞が酷かったが、印旛以降は、車道はガラガラで空いていた。開いているガソリンスタンド前だけ、数百mから1キロ以上もの渋滞が生じていた。

### 2. 4. 運搬物資

#### ・運搬物資

電池等：携帯の充電器4組

衛生用品等：温湿布（14cm×10cm）100枚、ウェットティッシュ（100枚入り）1ケース、詰め替えパック（80枚入り）2パック、割り箸200本

#### ・準備について

現地入り前日の昼からスーパーコンビニを回ったが、パン・カイロ・水のいないシャンプーなどは、全く手に入らず、手に入れられる湿布とウェットティッシュなどを少数ずつ買いそろえた。買い占めないように大量に残っている商品の一部を買い込んだ。旭市に向かう途中、コンビニを何か所も覗いてみたところ、パンはことごとく売り切れていたが、都市部を離れるとおにぎりは残っている店が多くみられた。

### 2. 5. 被災の状況（通った通りや地域のみを報告で全域を回った状況報告ではない）

#### ・現地までの沿道について

道路：国道356号の我孫子市湖北から布佐にかけて、各所で道路陥没や崩落のために通行止めになっていた。多くの所が車のみ通行止めだったが、一部自転車も通れないところもあった。急ピッチで修復工

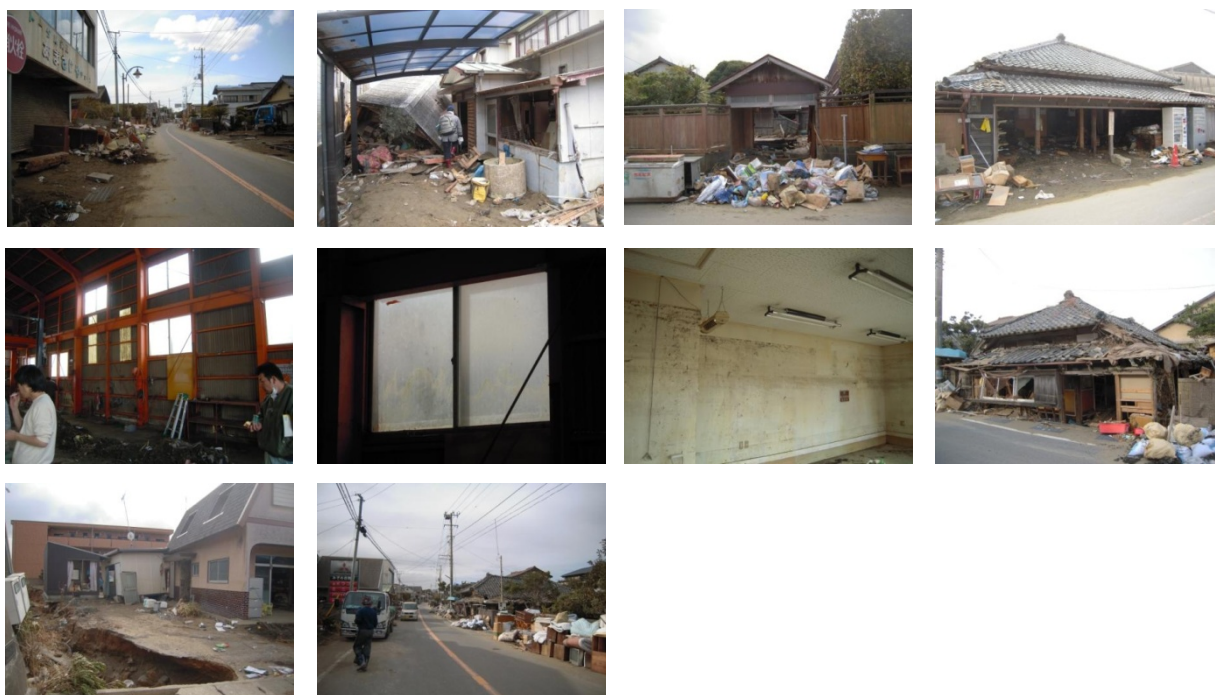
事がなされており、夜 11 時頃に戻ってきたときには全て復旧していた。多古や水郷あたりでも道路の陥没地点が多数あったが、これらも修復が進められており、通行は可能だった。各地でガードレールが曲がったり倒れたりしているのは見かけた。

建物：ほとんど被害住宅は見られなかった。

#### ・現地（旭市飯岡地区海近く）

道路：津波被災地から数百 m のボランティアセンター周辺までは、何の問題も見られない。津波が入った地域に入ると、泥や被害にあった家財道具の山が道路の両脇に並んでいた。路面も泥の除去は完了していたが、薄く泥で覆われていた。

建物：津波被災地から数百 m のボランティアセンター周辺までは、何の問題も見られない。津波被災地に入ると、倒壊家屋も多くみられた。倒壊していない家屋も、家の中も事務所の中なども 10 センチほどの泥で覆われており、それらの泥は塩水で重く硬く詰まっており、除去も大変な状況だった。ありとあらゆる隙間（二重の扉の間など）にも泥が詰まっている。家財道具一式も、1 階に置いたものは泥にまみれており、全て廃棄せざるを得ないため、全て家の外の道路脇に運び出されていた。天井付近の壁や窓の内側に、泥水が来た跡が残っていた。



## 2. 6. 現地の状況・反応、現地での活動について

ボランティアセンター開設とボランティア募集の記事が当日朝のテレビや新聞で報道されたことから、旭市内や近隣都市からボランティアが集まってきていた。ボランティアは、インターネット等で告知した手伝いを要する住民からの要請を受けて、集まっているボランティアとマッチングさせて派遣するというシステム。告知を知らない人が多いらしく、依頼は 10 件未満であり、朝 9 時に来たのに 12 時過ぎでも座って待つのみというボランティアも 20 名程度いた。また、赤十字から多くのボランティアが入っているもようだった。持ってきた物資を本部に持って行くと、物資はあまりないらしく、非常に感謝された。

13 時前から、津波被害の大きかった地域に 22 人で行って、手伝い希望を聞いて回るようになった。現地に向かう途中で、千葉県東方沖震源の震度 5 弱の地震が発生したが、津波注意報も出なかったことから現地入りした。現地では作業していた人は誰もが手助けを求めており、手伝い希望を聞いて断る人はいなかった。希望を受け付けて書類記入が終わり、作業（自動車工場・事務所内の泥の除去）開始から 1 分も

しない内に、「津波が来るぞお～」との叫び声。近所の住民らの中に、車の飛び乗って逃げる人もいた。多くの近所の住民らとゾロゾロと高台に向かったが、早く歩くことのできないおばあさんもおり、本震の東北の津波で、こうして逃げ切れずに飲み込まれてしまった人も多くいるのだらうなど、辛い気持ちになった。途中、坂を降りてくる車があったが、避難中の一人の住民が駆け寄って、窓をたたいて大声で、「津波が来るよ、引き返して引き返してっ」と、大声で叫び、運転手もバックのままものすごい急加速で坂を引き返して行った。実際に体験された方の恐怖感を身近で実感させられた瞬間だった。数十分経って、津波注意報も出ず、波も来ないことから、住民らは作業するために家に戻って行ったが、ボランティアは、ボランティア本部からの指示で、本日の作業は中止ということになった。住民の方に、手伝いを申し出て手伝えないことが、何もしない以上に精神的な疲労を与えてしまうことが辛く、津波注意報すら出ていない上に住民らは作業を再開しているということを経験した理由に、ボランティア本部でボランティアの再開を迫ったが、聞き入れられることはなく、本日のボランティアは終了ということになった。

その後、その場で共感した有志 7 人と語らって、自己責任の確認と緊急時の連絡体制と避難場所を決めた上で、それぞれが手伝いを申し出た家や工場に戻って作業を再開した。まずは、2 名のボランティアとともに自動車整備場の 12 畳程度の事務所一面の泥の除去作業に取り掛かった。泥は 10 センチ以上の厚さで床の上に積もっており、海水を吸って非常に重く堅く、また泥の中には様々な雑誌や皿、工具や服などが入っていたことから、スコップを入れるのも一苦労な代物だった。事務所の泥撤去し終えた後は、10m × 20m 程の広さの整備場に移り、同様に積もっていた泥の除去に取り掛かった。整備場前の屋外には一輪車で運び出した泥山が、見る見るうちに大きくなっていった。整備場の扉と壁の間にも泥がぎっしり詰まっていた。2 m を超える高さの棚の上にも、藁のようなものが大量に乗っており、上下横どこからも泥が出てくるという状態だった。何とか床の泥を全て剥がし、扉も閉められるようになって、工場主から、「自分たちだけでやったら 3 日は掛った作業が一日で終わった、ありがとう!!!」との嬉しい嬉しい言葉もらった。完全復興後に再度訪問する約束をしてこの工場は終わり。

16 時前だったので、向かいで作業している家へ向かい、30 分程度しかお手伝いできないがとの前置きをしたうえで、手伝いを申し出た。こちらでは、泥水につかった室内のものを廃棄のために屋外路上に出す作業。通常であれば、女子供でも楽に持ち上げることでできる衣装ケースが、中に入った泥と水のせいで、非常に重くなっており、持ち上げるのもやっとの重さ。何とか外に持ち出すのを何度も繰り返した。布団なども同様にとても重くなっており、引き摺って外に出すしかないものもあった。16 時半前には、我孫子への帰る時間を考えて、ほとんど手伝えなかったことを謝りながら、辞した。

途中、他の住宅での作業中の仲間に声をかけて、一人帰ることとした。その家では、彼らを含めた住人による部屋の片づけと同時並行で、その場で新しい板を切り出して床の張り替えを始めていた。再生・復興への明るい希望を見た気がした。



工場の方に聞いた話では、工場の方々は、地震の後数十分したところで、排水溝の蓋が浮き上がり始めたため、川の水が逆流し始めており津波が来る前兆を感じ、慌てて車に乗って近くの灯台まで逃げたらしい。海の上を進む白い波が近づいてくるのが高台の灯台からよく見えたらしい。一回目の津波は比較的小さかったため、大きな被害は確認されなかったらしい。向かいの家の方はその時に一緒に逃げていたが、一回目の津波が引いた後に家に戻ったらしい。工場の方がしばらく灯台の所にいたところ、銚子方面か

ら来る白い波と南の方からくる白い波が沖合で合流して大きくなって近づいてくるのが見え、見る見るうちに町まで波が流れ込んできたらしい。向かいの家の方は、すぐに増水したために逃げることができず、二階へ上がって、足元すぐまで上がってきた水を恐怖におのきながら見ていたが、何とか水が引いて命拾いしたとのこと。津波が第2波や第3波で大きくなるという話はよくテレビなどでも聞いていたが、実体験を始めて聞くことができた貴重な瞬間だった。

## 2. 7. 誤算等

行きの通行止めとルートを読み間違い、帰りの銚子経由の遠回りのために、片道 70 キロ程度の距離なはずの道のりが、往復で 200 キロ程度も走るようになってしまった。また、帰りは終始強い向かい風だったことと、相当疲れていたことから、予定よりもはるかに時間が掛かってしまった。また、帰り途中に自転車のライトが切れてしまったため、非常用の懐中電灯をハンドルに固定して走るようになってしまった。